

V 調査の成果と課題

1 続縄文土器について

本遺跡から出土した土器はほとんどが続縄文土器で、主体は後北B式に相当するものである。南川IV群（註1）に相当する恵山式土器や後北C₂・D式に相当するものも出土している。

本遺跡の恵山式土器は器形の全体が明らかなものはないが、甕形土器が多い。口縁部が内湾気味に立ち上がるもの、外反するもの、体部に張りのあるもの等がある。図IV-1-20は口縁の内傾する深鉢形土器と考えられる。口縁部に横走する縄文の施されたものや、逆三角形の無文部があるものは鉢形ないし浅鉢形土器の可能性が大きい。文様要素としては、帯状縄文、沈線文、列点文・短刻線文、刻み目等がある。帯状縄文には沈線で縁取りされたものと縁取りのないものがある。沈線文には口縁に平行なものや小波状・連弧状等がある。文様構成は簡略化される傾向にあるようである。内面はみがかれているが、ざらつきのあるものもみられる。肉眼による観察ではあるが、約半数のものの胎土には海綿骨針が含まれている。

瀬棚町南川遺跡（上野・羽賀・田部ほか 1983）や奥尻町米岡第2遺跡（佐藤編 1978）・青苗B遺跡（木村編 1999）等では、甕形土器の体部上半に横走縄文とそれを縁取る沈線によってX字状やC字状の文様の描かれたものが出土しているが、本遺跡では確認されておらず、これらよりも先行する段階の土器と考えられる。後北式土器との関係では、後北A式に併行するものである。

八雲町内ではシラリカ遺跡（柴田 1988）、山崎1遺跡（柴田 1988）、山越6遺跡（八雲町教育委員会編 1988）等からこの頃の土器が出土している。

本遺跡から出土した後北B式は深鉢形、浅鉢形、壺形土器からなる。深鉢形土器の器形は口縁がわずかに開く倒鐘形のものが多い。口唇直下に刻み目のある隆起線がめぐり、口縁部から胴部上半にかけて横走する帯状縄文や列点文の施されたもの（図IV-2-16~19）もあるが、多くは隆起線を組み合わせて菱形や凸レンズ状等の文様が構成されている。隆起線は上下をなでつけて整形されたものが多い。図IV-2-21の菱形状の文様はゆがみが大きく、割付も不均等である。口縁に刻み目のある隆起線が施され、その下位には横走縄文の地に列点文や平行する多重沈線の加えられたもの（図IV-1-24~27）も出土しているが、このような土器は恵山式と後北式の両方の要素をもったものといえよう。壺形土器には吊り耳のあるもの（図IV-1-47・48）や赤色顔料の塗彩されたもの（図IV-1-44~47）がある。後北式の内面調整はミガキだが、ざらつきのあるものも少なくない。約半数のものの胎土には海綿骨針が含まれている。黒雲母や砂粒等も胎土に含まれる量の多いものや少ないものがあり、いくつかの異なった胎土が用いられたと考えられる。

道央部で誕生した後北式土器はC₁式以降、南に向かっては道南地方から本州の北部まで広がりを見すが、それ以前の資料は散点的にしか報告されていない。

道南地方における後北A式は、末期の頃のもの伊達市南稀府5遺跡から出土している（大沼・千葉・田才ほか 1983）。八雲町内では、栄浜1遺跡で「後北A~B式ぐらいに相当する」ものや「後北A式土器に相当する可能性」のあるものが報告されている（柴田 1991）。七飯町大中山13遺跡では南川IV群土器の集中区域から「後北A式に似た土器」が出土しており、両者は共伴する可能性が強いと考えられている（北海道埋蔵文化財センター編 1995）。奥尻町青苗B地点遺跡から出土した土器もこの頃のものであろう（千代 1965）。

後北B式は、八雲町山越6遺跡（八雲町教育委員会編 1988）・栄浜1遺跡（八雲町教育委員会編

1987a、柴田 1988・1991)、七飯町聖山遺跡(吉崎・直井・松岡編 1979)、松前町白坂第4地点遺跡(久保・井上・石本ほか 1983)等に出土例がある。

山越6遺跡からは、口縁と平行な隆起線の施されたものや菱形や弧線状の隆起線で文様の構成されたものが出土している(八雲町教育委員会編 1988)が、これらは本遺跡出土の土器に類似している。栄浜1遺跡から出土した復原土器(柴田 1988・1991)は突起の下やそれらの中間に凸レンズ状の隆起線を縦位に重ね、横位の隆起線でつないだものである。器面に密集して施されたこれらの隆起線は細く、断面は四角い。破片資料には菱形や凸レンズ状の文様の施されたものがある。柴田によれば、「隆起線で描かれる文様の幅が胴部中央まで及んでおり、文様構成などもC₁式土器に近似しており、B式でもC₁式に近い時期のものと考えている」という(柴田 1991)。聖山遺跡の資料は頸部に縦および斜位の短沈線が描かれている(吉崎・直井・松岡編 1979)。

野田生5遺跡も含め、道南地方の遺跡から出土した後北B式土器には、繁縷に施された隆起線や列点文、隆起線によって構成された文様の不均等で粗雑な割付、短沈線や多重沈線といった、道央地方の土器とは異なる様相をもつものもある。これらは道南地方の人々の間に後北式土器が受容されていく中で生じた地域色とみてよいのではないだろうか(大沼 1982・石本 1984)。

次に東北地方の例を見てみよう。青森県では六ヶ所村千歳遺跡(13)(青森県教育委員会 1976)や脇野沢村九叟泊岩陰遺跡(江坂・高山・渡辺 1965)から出土した土器が「後北B式に近似し、その前後」(大沼 1978)のものとして知られていた(註2)が、最近では青森市小牧野遺跡(小牧野遺跡調査会・青森市教育委員会編 1996、青森市教育委員会編 1998)からも後北B式相当と考えられる土器が出土している(註3)。横走または斜行する帯状の縄文が沈線や列点文で縁取りされたものや、V字状の沈線を連繋させて菱形状の文様を描くもの等がある。これらの内面はみがかれているが、ざらつきがある。報告者は「隆起線を伴う土器に関しては、基本的な文様要素は類似するものの、文様の組み合わせ方及び製作過程、調整など北海道のものとはかなり異なっているものもあることから、搬入品ではないものがかかなり含まれている」と推定している(上野 1998)。

本遺跡から出土した後北C₂・D式のうち、図IV-2-37~41は大沼が後北C₂・D式を4段階に細分したうちの2番目の「一般的なC₂・D式」(大沼 1982)に含まれるものである(註4)。また、石本による道南地方の「江別C₂・D式」を3つの段階に細分した編年では、中葉に相当する(石本 1984)。胎土には海綿骨針が含まれている(註5)。

八雲町内ではトコタン2遺跡(野村 1982)、台の上遺跡(八雲町教育委員会編 1987b)、大新遺跡(八雲町教育委員会編 1998)等から後北C₂・D式が出土している。トコタン2遺跡の土器は小片だが、台の上遺跡と大新遺跡の資料は大沼の「一般的なC₂・D式」(大沼 1982)の段階のものである。

本遺跡ではI層から弥生系土器が1点出土している(図IV-1-23)。不均等な撚り合わせの縄による縄文の施された口縁部の破片である。

八雲町内では台の上遺跡(八雲町教育委員会編 1987b)で後北C₂式と同じ層(註6)から(1)交互刺突文と沈線文の施されたものや(2)不均等な撚り合わせの縄を用いて羽状縄文が施されたものが出土している。本遺跡の土器は(2)に類似したものであろう。

(1)は上野によって仮称「北海道2類」、(2)は同「北海道3類」(註7)の例としてあげられている。両者は時期的に近く、「福島県の編年という踏瀬大山式から十王台式に対応する時期」のものであり、後北C₂・D式との関係(註8)では、大沼の分類の「C₂式初」や「一般的なC₂・D式」(大沼 1982)に共伴する可能性が極めて高いと考えられている(上野 1992)。一方、小林によれば、「北海道側

での江別C₁式から江別C₂式の変化に対応する「北海道2類」から「北海道3類」への変化」がみられるという（小林 1993）。近年は更にこれらと古式土師器との関係について検討が行われている（石井 1994・木村 1999等）。

北海道内で出土した弥生系土器は現在までのところ、石狩低地帯と後志・檜山管内の日本海側に多く分布し、八雲町以東の太平洋側では出土していないようである（乾 1990等）。この空白の意味するものが北大I式の時期以降にはどのように変化したのか、土師器の分布の広がりとも重ね合わせると、興味深い問題である。

（中田裕香）

- 註 1 南川IV群は、1976年刊行の報告書では文様構成の簡略化の程度によってa類とb類の2つに分類されている（高橋・内山・土田ほか 1976）。1983年の報告書（上野・羽賀・田部ほか 1983）では文様構成を主に10類に細分されたが、それらの関係や新旧については言及されていない。
- 2 大沼は千歳遺跡(13)の土器を「帯状に縄文を沈線で区画する恵山式末期の文様が施されていて、後北式というよりは恵山式というべきもの」とも述べている（大沼 1982）。これに類似した恵山式土器は松前町白坂第4地点遺跡等から出土している（久保・井上・石本ほか 1983）。
- 3 小牧野遺跡では南川IV群や後北C₁式に相当するものも出土し、それらの中には胎土に海綿骨針の含まれたものが少量認められる。
- 4 上野は「一般的なC₂・D式」を「古」と「新」の2つの段階に分けている（上野 1992）が、八雲町内から出土した後北C₂・D式は破片資料のみのため、細分は行わなかった。
- 5 井上は胎土に海綿骨針の含まれた後北C₂・D式について、北海道・秋田県・岩手県の例を挙げている（井上 1995）。
- 6 この層からは後北C₁式も出土しているが、弥生系土器の出土した発掘区とは一致しない（八雲町教育委員会編 1987b）。
- 7 上野の定義では「撚糸文を主に用いた地文が全面に施されたもの」とある（上野 1992）。
- 8 石井もほぼ同様な見解を示している（石井 1994）。

2 石器について

今年度の調査では続縄文時代の後北B式土器が中心に出土し、点取り遺物の石器も出土状況から同時期の所産であると判断した。今回は野田生5遺跡で主体的な石器として捉えられ、且つ不定形石器としてあまり取り上げられないことのないピエス・エスキューについて若干の考察を行ってみたい。ピエス・エスキューは27点（個体）が出土し、内20点がI層出土であるが、I層はⅡ～Ⅲa層を主に攪乱した層であること、遺物が続縄文時代を主体とすることから、全て同一時期とみなし分析を行った。

ピエス・エスキューは日本では芹沢長介、岡村道雄らによって初めて注目された。芹沢は観察される剥離面が石器素材と成りえる剥片を剥離していないこと、共伴する台石、敲石がピエス・エスキューの製作に密接に関与したと推測されること等から両極剥離技法により製作された目的的な石器とした(1974)。岡村は諸々の特徴的な属性を指摘することによりピエス・エスキューを明確化し、さらに製作技術、年代、分布、機能にまで言及した。両者の研究は、それまで石核や不定形石器として看過